南琉球伊良部島佐良浜方言のアクセント（初期報告）

新田 哲夫（金沢大学名誉教授）

1. はじめに

伊良部島は宮古島西方にあり、佐良浜はその東側沿岸に位置する。佐良浜は古くは佐那浜と称し、宮古島北方の池間島から移住してきた人たちによって 1720 年に設立された。佐那浜は 1766 年に分村し、現在の池間添・前里添の 2 つの行政区分に引き継がれている。佐良浜は隣接するこの 2 つの地区の総称である。佐良浜の方言は、池間島の方言とともに「池間方言」の 1 つとされる。元島の池間島池間方言のアクセントの報告として、平山輝男他 (1968) がある。ソノシートの音声を聞くことができ、資料的な価値が高い。池間島からの移住民によって設立した他の集落としては、宮古島内の北部に位置する西原がある（1874 年に村立）。ここの言語も「池間方言」の 1 つとされる。宮古島の西原方言のアクセントについては、研究が進んでいる（五十嵐陽介他 2012, Igarashi et al. 2018, 五十嵐 2023）。しかしながら、佐良浜方言のアクセントについては、これまで詳しい報告がなかった。本発表では、佐良浜方言のアクセント体系、弁別特徴、他について初期報告を行う。また、西原方言のアクセントとの比較についても触れる。

2. 本発表の研究方法

本発表は 2023～2025 年の現地調査のデータに基づく。記述調査は池間添出身（1953 年生男性）、前里添出身（1942 年生男性）の 2 人の話者を対象に進めているが、今回は主として池間添の話者のデータを中心に述べる。

研究方法には次の (i)～(iv) の特徴がある。(i) 音調を H や L などの固定した高さの配列として捉えるのではなく、上げ、下げなどの音調の動きに注目する動的な観点で捉える。(ii) アクセント体系を考えるとき、宮古八重山諸方言の記述で用いられる「韻律語」という韻律単位を本発表でも用いる。(iii) 弁別特徴を示す「アクセント核」は 1 つの韻律語全体に置かれるものと仮定し、「有核韻律語」、「無核韻律語」の組み合わせによって型の記述を進める。(iv) 「韻律語」を、アクセント型の情報をもっている「主韻律語」（名詞・動詞などの自立語の語根）とそれをもっていない「副韻律語」（助詞、複合語後部要素など）に分けて分析する。

3. アクセント体系

表 1 で主な音調型を代表語を使って示す。体系上、3 つのパターン（「型」）が確認され、いわゆる「三型アクセント体系」であることが判明している。これらに a, b, c の記号を付し、後に a 型 b 型 c 型と呼ぶ。a, b, c に付く 2～4 の数字はモーラ数である。この方言では他の宮古諸方言と同様、1 モーラの自立語を欠いている。1 モーラ助詞「主格・属格」=nu、「対格」=u、「話題」=a 等が存在するが、前接する名詞と一体になり韻律的単位（韻律語）を形成する。表 1 の左、最初の列は代表語の単独「言い切り」、以下 3 列は「言い続け」を見るための例で、助詞「も」=*mai* を付けた文、助詞連続「からも」=*kara*=*mai* を付けた文、助詞「へ（方向）も」=*nkai*=*mai* を付けた文の例である。表中や本文の助詞等の例は斜体で示す。音調記号として、[上昇、] 下降、少し上昇して始まる場合、ꜜ の記号を用いる。また **Bold** は相対的に高いセグメントを表す。

3.1 音調実現の説明

単独言い切りの末尾の音調については、a 型 b 型では、末尾は低くなる（a2「夫」[**bu**]tu.～b4「頭」ka[**na**]mai.）。c 型の末尾は上昇する（c2「祖父」[**u**[**ja**.、c3「烏」[**gara**[**sa**.、c4「商人」a[**kja**]u[**da**.）。これは西原方言では見られない特徴である[1]。3 モーラ以上の代表語の上昇位置は、2 モーラ目から上昇して聞こえるものと語頭から高く聞こえものがあるが、その差は非弁別的と見なされる。もっとも 2 モーラ目が促音、長母音の後半等の音韻の条件によって常に語頭から高いものもある（b3「鶉」[**uz**]zja.、c4「うりずん（初夏）」[**bii**]zin.、しかし撥音はここに入らない b4「雷」ka[**n**]ai.）。また c 型の短い語、c2、c3 は最初から高く聞こえる場合が多く、加えて末尾の上昇を伴う。

表 1

型	単独言い切り.	～もいない etc.	～からも…	～へ（方向）も…
a2:「夫」	[**bu**]tu.	[**butu**]=*mai* ꜜmii[**n**.	[**butu**]=*kara*= *mai*...	bu[**tu=*n***]*kai*= *mai* ...
a3:「東」	a[**ga**]i.	a[**gai**]=*mai* ꜜmii]rai[**n**.	a[**gai**]=*kara*= *mai*...	a[**ga**]i=*nkai*= *mai* ...
a3:「昼」	[**hii**]ma.	[**hiima**]=*mai* ꜜkuu[**n**.	[**hiima**]=*kara*= *mai*...	[**hii**]ma=*nkai*= *mai* ...
a4:「2 人」	fu[**ta**]ai.	fu[**ta**]ai=*mai* ꜜmii[**n**.	fu[**ta**]ai=*kara*= *mai* ...	fu[**ta**]ai=*nkai*= *mai* ...
b2:「猫」	[**ma**]ju.	[**maju**]=*mai* [**miin**.	[**maju**]=*kara*= [***mai***...	ma[**ju=*n***]*kai*= [***mai*** ...
b3:「夜中」	ju[**na**]ka.	ju[**naka**]=*mai* [**kuun**.	ju[**naka**]=*kara*= [***mai***...	ju[**na**]ka=*nkai*= [***mai*** ...
b4:「頭」	ka[**na**]mai.	ka[**na**]mai=*mai* [**njaan**.	ka[**na**]mai=*kara*= [***mai***...	ka[**na**]mai=*nkai*= *mai* ...
c2:「祖父」	[**u**[**ja**.	[**uja**=***mai***] ꜜmii[**n**.	[**uja**=***kara***]= *mai*...	[**uja=*nkai***]= *mai* ...
c3:「烏」	[**gara**[**sa**.	[**garasa**=***mai***] ꜜmii]rai[**n**.	[**garasa**=***kara***]= *mai*...	ga[**ra**]sa=*n* [***kai***]= *mai* ...
c4:「商人」	a[**kja**]u[**da**.	a[**kja**]uda=[***mai***] ꜜmii[**n**.	a[**kja**]uda=[***kara***]= *mai*...	a[**kja**]uda=*n* [***kai***]= *mai* ...

語彙: mai「も」、kara「から」、miin「いない」、miirain「見えない」、kuun「来ない」、njaan「ない」、nkai「へ」（韻律語では n-kai と切れる）

次に、助詞が後続する「言い続け」の場合、2 モーラ、3 モーラ語は a 型 b 型 c 型を問わず、助詞の直前まで高く途中で下がらない（a2: [**butu**] *mai*...、a3: a[**gai**] *mai*...、b2: [**maju**] *mai*...、b3: ju[**naka**] *mai*...、c2: [**uja**] *mai*...、c3: [**garasa**] *mai*...）。ただし 4 モーラ語では高いのは 2 モーラまでである（b4: ka[**na**]mai *mai*...、c4: a[**kja**]uda *mai*...）。*mai* に続く動詞、「いない」miin、「見えない」miirain、「来ない」kuun、「ない」njaan については、a2, a3, a4 のとき *mai* のあと自然下降に従って低いまま続くのではなく、少し上昇して始まるように聞こえる。ただし、b2, b3, b4 において明瞭に述語部分が高くなるのと比べると対立は明瞭である。なお、これらの動詞においては、末尾でわずかな上昇が観察される。

b2, b3, b4 の助詞連続 *kara mai* の場合は *mai* の部分が明瞭に高いに対して、他ではそうした上昇が見られない。助詞「へ」*nkai* は、音調上は *n-kai* と切れて、*n* の部分が前接名詞に付き、音調上の単位の長さ（後に示す「韻律語」の長さ）が長くなる。a3: a[**gai**] *mai* ～ a[**ga**]i*n kai*、b3: ju[**naka**] *mai* ～ ju[**na**]ka*n kai* では、3 モーラ名詞に *n-kai* が付くと *n* を取り込んで韻律語が 4 モーラになり、下降の位置が名詞末尾から 2 モーラ目へと交替する。その他、4 モーラ語で 3 モーラ目が長母音の後半になるときは、a4「2 人」fu[**ta**]ai～fu[**taa**]i、a4「2 つ」fu[**ta**]aci～fu[**taa**]ci̠ と下降が遅れる発音も聞かれるが、これも非弁別的特徴なユレと見なされる。

[1] ただし、前里添出身の話者については、言い切りの語末の上昇は顕著ではない。池間添と前里添の方言差の可能性もある。

3. 2 音韻解釈

これらの音調実現を踏まえ、「韻律語」 ( ) を用いて音韻解釈を行うと表 2 のようになる。「韻律語」とは、自立語だけでなく、2 モーラ以上助詞等の付属語も韻律的単位として同等と見なして、出現する韻律のパターンの規則性を見極めようとするものである。「韻律語」を形態上の働きと韻律上の機能の点から、「主韻律語」と「副韻律語」に分ける。「主韻律語」は形態的に主に名詞、動詞などの自立語がそれに相当し、後に示す「型」の情報をもっている韻律語である。それに対し、「副韻律語」は助詞等の付属語がそれに相当し、それ自体に何型かの情報が与えられていない韻律語である。表 2 では、韻律語、アクセント核など音韻的な表示だけでなく、音調記号をそのまま残してある（ただし後部文節始めの ꜜ の記号は除いた）。

結論を先んじて言えば、この方言の弁別特徴は、後続する韻律語を上げる特徴と考えることができ、その特徴をもつものを「上げ核」⌋ で表すことができる。また、上げ核は韻律語そのものに付随すると考え、核のある韻律語を「有核韻律語」、核のないものは「無核韻律語」と名付ける。「上げ核」⌋ は上野善道 (1977)、Uwano (2012) で解釈された奈良田方言、蓮田方言の核を韻律語に適用したのものである。

表 2

型	単独言い切り.	～もいない etc.	～からも…	～へ（方向）も…
a2:「夫」	([**bu**]tu).	([**butu**]) (*mai*) (mii[**n**)⌋.	([**butu**]) (*kara*) (*mai*)...	(bu[**tun**]) (*kai*) (*mai*)...
a3:「東」	(a[**ga**]i).	(a[**gai**]) (*mai*) (mii]rai[**n**)⌋.	(a[**gai**]) (*kara*) (*mai*)...	(a[**ga**]in) (*kai*) (*mai*)...
a3:「昼」	([**hii**]ma).	([**hiima**]) (*mai*) (kuu[**n**)⌋.	([**hiima**]) (*kara*) (*mai*)...	([**hii**]man) (*kai*) (*mai*)...
a4:「2 人」	(fu[**ta**]ai).	(fu[**ta**]ai) (*mai*) (mii[**n**)⌋.	(fu[**ta**]ai) (*kara*) (*mai*)...	(fu[**ta**]ain) (*kai*) (*mai*)...
b2:「猫」	([**ma**]ju).	([**maju**]) (*mai*)⌋ ([**miin**)⌋.	([**maju**]) (*kara*)⌋ ([***mai***)...	(ma[**jun**]) (*kai*)⌋ ([***mai***)...
b3:「夜中」	(ju[**na**]ka).	(ju[**naka**]) (*mai*)⌋ ([**kuun**)⌋.	(ju[**naka**]) (*kara*)⌋ ([***mai***)...	(ju[**na**]kan) (*kai*)⌋ ([***mai***)...
b4:「頭」	(ka[**na**]mai).	(ka[**na**]mai) (*mai*)⌋ ([**njaan**)⌋.	(ka[**na**]mai) (*kara*)⌋ ([***mai***)...	(ka[**na**]main) (*kai*) (*mai*)...
c2:「祖父」	([**u**[**ja**)⌋.	([**uja**)⌋ (***mai***]) (mii[**n**)⌋.	([**uja**)⌋ (***kara***]) (*mai*)...	([**ujan**)⌋ (***kai***]) (*mai*)...
c3:「烏」	([**gara**[**sa**)⌋.	([**garasa**)⌋ (***mai***]) (mii]rai[**n**)⌋.	([**garasa**)⌋ (***kara***]) (*mai*)...	(ga[**ra**]san)⌋ ([***kai***]) (*mai*)...
c4:「商人」	(a[**kja**]u[**da**)⌋.	(a[**kja**]uda)⌋ ([***mai***]) (mii[**n**)⌋.	(a[**kja**]uda)⌋ ([***kara***]) (*mai*)...	(a[**kja**]udan)⌋ ([***kai***]) (*mai*)...

a 型 b 型の名詞単独は「無核韻律語」の単体を言い切ったものである。b 型は、*mai*, *kara* など、「型」の情報をもっていない「副韻律語」が続いたときのみそこに核が置かれる。すなわち b 型は副韻律語が後続したときに a 型との区別が生じる。b 型でも 2 番目の韻律語が主韻律語の場合は、その主韻律語の型に従う。b 型「豆を」([**mamiju**]) (niin). (a 型「煮ない」)、([**mamiju]**) (mii[**n**)⌋. (c 型「見ない」)。下線の a 型「煮ない」(niin)、c 型「見ない」(mii[**n**)⌋ はそれぞれ主韻律語で、本来無核の a 型:「煮ない」(niin) は有核にならず、また c 型「見ない」(mii[**n**)⌋ が有核なのは、本来の c 型の核が現れたものである。

a 型 b 型の単独形は双方無核韻律語であるので対立しない。特定の環境において本来存在する音韻的対立を失う「中和」の状態にあるとは考えない。後続の副韻律語がない限り、音韻的に同等の無核韻律語が存在するだけと考える。無核韻律語の場合は、言い切りの音調のイントネーションが顕著に現れる。五十嵐 (2015: 29) がいう Final Lowering（以下 FL）である。この下降は「言い続け」の場合は見られないため、非弁別的特徴と見なされる。

c 型の名詞単独は「有核韻律語」の単体を言い切ったものである。韻律語末の上昇は、次の韻律語上げるという「上げ核」の存在の「徴憑」と見なされる。c 型の単独形は有核韻律語ゆえに、無核韻律語の a

型 b 型の単独形と対立する。また FL は、一般に「上げ核」がある韻律語末では発生しない。次の韻律語を上げるという「上げ核」の特徴が音調上逆向きの FL を抑制していると考える。総じて、言い切りの場合、無核韻律語は末尾が下がる、有核韻律語は末尾が下がらず上がる。平山他 (1968) で取り上げた池間島池間方言の例では、下がりに注目して「型」の認定を行っていたが、佐良浜方言では、言い切りで下がらない発音の方が「有標」である。

「言い続け」のパターンは、a 型は「主韻律語」の末尾後（2, 3 モーラ韻律語）か途中（4 モーラ韻律語）で下降した後、それに続く助詞等の「副韻律語」がそのまま続く、b 型は「主韻律語」に接続する「副韻律語」の後に上昇が現れ、後続の韻律語が高くなる。高くなるのは、主韻律語・副韻律語、有核・無核の韻律語を問わない。c 型は「主韻律語」に後続する韻律語が高くなる。c 型の「主韻律語」の終端が高くても低くても次の韻律語を高くする。「主韻律語」が単独で発話末になった場合、韻律語終端に上昇が現れる。

表 2 で現れた a 型 b 型 c 型の言い続けの 3 つの型について、2 つの韻律語を並べて表すと (1) のようになる。それぞれ 1 つ目の韻律語は主韻律語、2 つ目は助詞等の副韻律語である。

(1)「型」と韻律語

a 型:　(　) (　)　　1 番目の主韻律語、2 番目の副韻律語ともに無核

b 型:　(　) (　)**⌋**　　1 番目の主韻律語は無核、2 番目の副韻律語が有核

c 型:　(　)**⌋** (　)　　1 番目の主韻律語が有核、2 番目の副韻律語は無核

実際、b 型については、副韻律語が隣接するときのみ、そこに核が現れるという指定が必要だが、a 型 c 型では 2 番目の副韻律語の指定は不要である（2 番目に主韻律語が来るときは、その型に従うだけ）。以下の (2) のように単純に表すことができる。

(2)「型」と韻律語（単純な表示）

a 型:　(　)　　無核

b 型:　(　) (　)**⌋**　　隣接する副韻律語が有核

c 型:　(　)**⌋**　　有核

この体系は、多良間方言（アクセント低核）、与那覇方言（昇り核）とアクセント核の種類の違いはあるものの、佐良浜方言（上げ核）を含めた宮古諸方言に通底した体系と見なされる。また一般言語学的に見て、もっとも無理のない自然な体系であると見なされる（新田哲夫 2023a, 2023b）。

3. 3 「型」の表記

表 1、2 の体系は、Igarashi et al. (2018) で詳述された西原方言の体系と非常に似ている。大きな違いは、先述したとおり c 型の実現形で単独の言い切り形に上昇がないことがあげられる。

後の五十嵐 (2023) では、それぞれの型の区別に必要な 3 つの韻律語の例を (3) のようにあげている（セグメントに付く“ . ” はモーラの境界、[　] で文節を表すを表記をそのまま採用）。

(3) 五十嵐 (2023: 510) の例（一部補い）

a 型 [(bu.**tu**.)=(ma.i)] [(mi.i.n)]　　「夫もいない」

b 型 [(ma.**mi**.)=(ma.i)] [(**nja.a.n**)]　「豆もない」

c 型 [(na.**bi**.)=(**ma**.**i**)] [(nja.a.n)]　「鍋もない」

これらの高ピッチの H が卓立する音調の分布から、a 型: (**H**) (　) (　)　b 型: (**H**) (　) (**H**)　c 型: (　) (**H**) (　) の形で表すことができるとしている。ここでの c 型においては、1 番目の韻律語に現れる H を c 型の属性として認めない一方で、a 型 b 型の 1 番目の韻律語の H をその属性と認めている（Igarashi et al. 2018 において lexical なレベルで H が無指定だったものを変更）。c 型の 1 番目の韻律語の H を認めない理由として、mai に後続する韻律語、miin と njaan は c 型であるが、先行文節によって（その高さが）決定されているため、としている。これによって a 型 b 型の単独言い切りと c 型のそれの対立、a: (**bu**tu). b: (**ma**mi). vs. c: (**nabi**).、は示すことができるようになったが、問題もある。以下の (4) は西原方言ではなく佐良浜方言の例であるが、

(4) 佐良浜方言の例

	〜も煮ない（a 型）	〜もいない（c 型）
a 型 「夫」	([**butu**]) (mai) (niin).	([**butu**]) (mai) (mii[**n**)**⌋**.
b 型 「猫」	([**maju**]) (mai)**⌋** ([**niin**).	([**maju**]) (mai)**⌋** ([**miin**)**⌋**.
c 型 「祖父」	([**uja**)**⌋** (**mai**]) (niin).	([**uja**)⌋ (**mai**]) (mii[**n**)**⌋**.

無核 a 型: (niin)「煮ない」においても、それ自体は (**H**) かどうかは決まっておらず、最初の韻律語によって決定される点は、有核の c 型: (miin)**⌋** と同じで、a 型の 1 番目の韻律語に (**H**) を設定する根拠にならない。おそらく西原の場合も、a 型 b 型においても c 型同様、一番目の (**H**) がその型の属性と見なさない方が実情に即していると推察される。

4. 韻律語の高まりとフット

3. 1 において 3 モーラ名詞に助詞 *n-kai*「へ」が付くと *n* を取り込んで前の韻律語が 4 モーラになり、下降の位置が名詞末尾から 2 モーラ目に交替する現象について触れた。これは、Igarashi et al. (2018)、五十嵐 (2023) で指摘されたフットの関連した現象である。五十嵐 (2023) と同様、フットを ＜　＞ で囲って表記する。1 フットは基本 2 モーラ単位で、形態的なまとまりによって最大 3 モーラまで 1 フットとなり得るが、3 モーラを超すと、＜2＞+＜2＞、＜2＞+＜3＞ のように、フットを分割する（Shimoji 2009、五十嵐 2023）。(5) では主韻律語のフット数が増えていることが示されている。

(5) 3 モーラ名詞の交替

a3: a[**gai**] *mai*...〜 a[**ga**]i*n kai*...	(<a[**gai**]>) (<*mai*>)... 〜 (<a[**ga**]> <in>) (<*kai*>)...
b3: ju[**naka**] *mai*...〜 ju[**na**]ka*n kai*...	(<ju[**naka**]>) (<*mai*>)... 〜 (<ju[**na**]> <kan>) (<*kai*>)...

今後の精査は必要だが、(6) で示すように、佐良浜方言においては、韻律語内で、最初の 1 フットのみに H が現れ、Igarashi et al. (2018) で取り上げた、韻律語内での(<H> <L> <**L**> <L>) 〜 (<H> <L> <**H**> <L>) の音調交替、Rhythmic Alternation I は起こらないとみている。

(6) 長い動詞句の例

	a 型「考え-ぞする《強め》」	c 型「間違え-ぞする《強め》」
基本	(<[**kan**]> <gai>) (<dusi>).	(<[**bap**]> <pai>)**⌋** (<[**du**]si>).
過去	(<[**kan**]> <gai> <tai>) (<dusi>).	(<[**bap**]> <pai> <tai>)**⌋** (<[**du**]si>).
受身	(<[**kan**]> <gai> <rai>) (<dusi>).	(<[**bap**]> <pai> <rai>)**⌋** (<[**du**]si>).
受身過去	(<[**kan**]> <gai> <rai> <tai>) (<dusi>).	(<[**bap**]> <pai> <rai> <tai>)**⌋** (<[**du**]si>).

したがって、「カマキリ」[**saa**] ruka [**muu**] taa.、「カマキリもいない」[**saa**] ruka [**muu**] taa] *mai* mii[**n**. のような 8 モーラ 4 フットの単語の例も、(<[**saa**]><ruka><[**muu**]><taa>). のように 3 フット目 <[**muu**]> の H が交替によって L から生じたのではなく、6 節で後述する、前部要素が有核の韻律語からなる複合語 ([**saa**] ruka)⌋ ([***muu***] *taa*). として解釈できるのはないと考えている。

5. その他の特異な助詞

「nu 主格+du 焦点」からなる *nudu* は、いくつかの宮古諸方言では例外的な振る舞いをする（五十嵐 2015、松森 2010, 2013 など）。この中にあって佐良浜方言では *mai*, *kara* など他の 2 モーラ助詞と同じ振る舞いをし、特殊な助詞ではない。これは西原方言と共通である（Igarashi et al. 2018: 91）。

他方、*cjaaka*「～だけ（限定）」は、前の韻律語をすべて c 型にしてしまう。いわば「支配型」の助詞である。主韻律語の名詞末の核が、助詞の側からもたらされたとするなら、常に高く付く助詞 ⌋ ([***cjaaka***]) と表記できるかもしれない。またそれは本土方言の常に低く付く助詞「～しか」「～まで」等と対比しうる。*cjaaka* のほかに *taana*, *taan*「だけ（限定）」が同様の振る舞いをする。

表 3

型	単独言い切り.	～が（ぞ）…	～だけ…
a2:「夫」	([**bu**]tu).	([**butu**]) (*nudu*) (mii[**n**)⌋.	([**butu**)⌋ (***cjaaka***]) (mii[**n**)⌋.
a3:「東」	(a[**ga**]i).	(a[**gai**]) (*nudu*) (mii]rai[**n**)⌋.	(a[**gai**)⌋ (***cjaaka***]) (mii]rai[**n**)⌋.
a3:「昼」	([**hii**]ma).	([**hiima**]) (*nudu*) (kuu[**n**)⌋.	([**hiima**)⌋ (***cjaaka***]) (kuu[**n**)⌋.
a4:「2 人」	(fu[**ta**]ai).	(fu[**ta**]ai) (*nudu*) (mii[**n**)⌋.	(fu[**ta**]ai)⌋ ([***cjaaka***]) (mii[**n**)⌋.
b2:「猫」	([**ma**]ju).	([**maju**]) (*nudu*)⌋ ([**miin**)⌋.	([**maju**)⌋ (***cjaaka***]) (mii[**n**)⌋.
b3:「夜中」	(ju[**na**]ka).	(ju[**naka**]) (*nudu*)⌋ ([**kuun**)⌋.	(ju[**naka**)⌋ (***cjaaka***]) (kuu[**n**)⌋.
b4:「頭」	(ka[**na**]mai).	(ka[**na**]mai) (*nudu*)⌋ ([**njaan**)⌋.	(ka[**na**]mai)⌋ ([***cjaaka***]) (njaa[**n**)⌋.
c2:「祖父」	([**u**[**ja**)⌋.	([**uja**)⌋ (***nudu***]) (mii[**n**)⌋.	([**uja**)⌋ (***cjaaka***]) (mii[**n**)⌋.
c3:「烏」	([**gara**[**sa**)⌋.	([**garasa**)⌋ (***nudu***]) (mii]rai[**n**)⌋.	([**garasa**)⌋ (***cjaaka***]) (mii]rai[**n**)⌋.
c4:「商人」	(a[**kja**]u[**da**)⌋.	(a[**kja**]uda)⌋ ([***nudu***]) (mii[**n**)⌋.	(a[**kja**]uda)⌋ ([***cjaaka***]) (mii[**n**)⌋.

6. 複合語アクセント

複合語アクセントについて、表 4 に示す地名の代表例を使って述べる。複合語は a2「嫁」(jumi) を後部要素にもつもので、「地名出身の嫁」、あるいは「地名に嫁いだ嫁」の意味である。表中、a3～c4 は、それぞれ複合語前部要素となる地名の「型」とモーラ数である。

表 4

型	前部要素言い切り.	～嫁.	～嫁が（ぞ）おる
a3:「八重山」	([**jaa**]ma).	([**jaama**]) (*jumi*).	([**jaama**]) (*jumi*) (*nudu*) (u]i).
a4:「西原」	(ni[**si**]mura).	(ni[**si**]mura) (*jumi*).	(ni[**si**]mura) (*jumi*) (*nudu*) (u]i).
b3:「宮古」	([**mjaa**]ku).	([**mjaaku**]) (*ju*[***mi***)⌋.	([**mjaaku**]) (*jumi*)⌋ ([***nudu***]) (u]i).
b4:「沖縄」	(u[**ci**]naa).	(u[**ci**]naa) (*ju*[***mi***)⌋.	(u[**ci**]naa) (jumi)⌋ ([***nudu***]) (u]i).
c3:「多良間」	([**tara**[**ma**)⌋.	([**tarama**)⌋ (***ju***]*mi*).	([**tarama**)⌋ (***jumi***]) (*nudu*) (u]i).
c4:「佐良浜」	(sa[**ra**]ha[**ma**)⌋.	(sa[**ra**]hama)⌋ ([***ju***]*mi*).	(sa[**ra**]hama)⌋ (*ju*[***mi***]) (*nudu*) (u]i).

「言い切り」ついては、3.1 で述べたとおりである。複合語の後部要素は、2 モーラ以上の助詞同様、それ自体「型」をもたない副韻律語として扱うことができる。複合語においても、a 型: 主韻律語が無核、b 型: 2 番目の副韻律語が有核、c 型: 主韻律語が有核、としてまとめることができる。

a 型では 1 番目の無核の主韻律語で下がった後、(*jumi*) が素直に低く付き、上昇が見られない。

それに対して b 型では、主韻律語の下降のあと、副韻律語 (*jumi*)⌋ に核が現れてそれ自体が上昇する。b3: ([**mjaaku**]) (*ju*[***mi***). に対する、b4: (u[**ci**]naa). (ꜜ*ju*[***mi***). のように、b3 の 1 番目の韻律語が高いまま終わった直後の方が、b4 の 1 番目の韻律語が低くなったあとより、副韻律語の下降と上昇が顕著に聞こえた。副韻律語 (*ju*[***mi***)⌋ に下降がないのは「上げ核」による作用である。

次に、c 型の ([**tarama**)⌋ (***ju***]*mi*). は、前部要素が高く終わり、そのまま副韻律語が高く続き、言い切りの末尾で下降する。この下降は、先述べた Final Lowering（FL）である。(sa[**ra**]hama)⌋ ([***ju***]*mi*). では前部要素が 2 モーラ目以降下がった後で、「上げ核」によって副韻律語が高くなり、無核韻律語であるために末尾で FL が現れる。

複合語の言い続けとして～(*nudu*) (ui)「～が(ぞ) おる」を例にとる。(*nudu*) は (*kara*), (*mai*) と同様、韻律上一般的な 2 モーラ助詞として扱うことができる。b 型 ([**mjaaku**]) (*jumi*)⌋ ([***nudu***]) (u]i).と (u[**ci**]naa) (jumi)⌋ ([***nudu***]) (u]i).では、2 番目の韻律語が有核であるため、(*nudu*) は上昇する。最後の (u]i) はすべて低く付くが、さらに末尾で下降して聞こえる。c 型の ([**tarama**)⌋ (***jumi***]) (*nudu*)... のように *jumi* が H から続く場合はそのまま H の連続で実現するが、 (sa[**ra**]hama)⌋ (*ju*[***mi***]) (*nudu*)...のように *jumi* が L から続く場合は上昇が遅れて (*ju*[***mi***]) のように実現する。おそらく (sa[**ra**]hama)⌋ ([***jumi***]) (*nudu*)... と発音した場合と音韻的な区別はないと思われる。

7. 上げ核を使った通時的な説明の一例

宮古諸方言同様、この方言の複合語アクセントは、原則的に前部要素が主韻律語、後部要素が副韻律語になる。すなわち前部要素が全体の「型」を決定する「前部要素支配」であるが、前部要素が短音化して 1 モーラになり、韻律語の資格をなくして全体が一韻律語になる場合がある（例えば、(mii) (hana)「目+鼻」 > (mihana)「顔」）。その場合は、「前部要素支配」の規則は当てはまらない。b 型 1 音節 2 モーラ名詞 b2「目」mii、b2「手」tii 等を前部要素とし、短音化して一語になった全体は、c 型になる規則 (7) が見られる。この現象は (8) のように上げ核を使って簡単に説明できる。

(7) 複合語規則

b2「目」(mii) ~ (mii) (*mai*)⌋　c3: [**miha**[**na**.「顔」《目+鼻》、c3: [**miha**[**gi**.「眼病、トラコーマ」《目+剥ぎ?》、c4: mi[**ta**]ma[**i**.「盲人」

b2「手」(tii) ~ (tii) (*mai*)⌋　c3: [**tibi**[**ra**.「掌」《手+平》、c3: [**tiga**[**ni**.「指輪」《手+金》、cf. c4: ti[**nu**]fu[**zi**.「手首」《手の+首》

b2「歯」(haa) ~ (haa) (*mai*)⌋　c3: [**haba**[**si**.「歯茎」《歯+端》、cf. b: (haa) (*basi*)⌋ ([**mai**)...長いままの複合語

(8) 上げ核を使った通時的な説明

「目」b: (mii) (*hana*)⌋ > c: (mihana)⌋　「顔」

「手」b: (tii) (*bira*)⌋ > c: (tibira)⌋　「掌」

「歯」b: (haa) (*basi*)⌋ > c: (habasi)⌋　「歯茎」

b 型の後部要素である副韻律語のアクセント核をそのまま維持したまま、前部要素が短音化して後部要素と一体となったが、元の副韻律語の核はそのままで、全体が c 型の主韻律語になったものである。

8. まとめ

本発表おいて述べた要点（利点）を箇条書きにする。

1. 「上げ核」を使うことでほとんどの音韻現象を説明できる。
2. 「三型アクセント体系」をシンプルな体系で表示することができ、また他の宮古諸方言の体系との共通性を見出すことができる。
3. 「上げ核」を使えば、通時的な現象も簡単に説明できる。

しかしながら、残された課題も多い。まず、「文節」の果たす役割について明確にすべきである。また同時に、一続きに発音されたときの「句音調」との関連についても解明すべき点がある。また Igarashi et al. (2018) で指摘された、「韻律語」を単位として起こり、低い韻律語が連続したときに高い韻律語に交替する Rhythmic Alternation II に関しても、佐良浜方言では精査を行っていない。さらに、現在の池間島池間方言、西原方言、佐良浜方言の 3 つ方言間での比較言語学的研究も残されたままである。佐良浜は池間島から分かれて約 300 年、西原は約 150 年である。お互いの方言間の接触と干渉はあるものの、言語の分岐が実際にどのようにおこるのか、これらの言語の相違を明らかにすることで具体的な観察ができる。これらの観察は、歴史言語学的・社会言語学的に興味ある知見をもたらすものと期待できる。

【引用文献】

五十嵐陽介 (2015) 「南琉球宮古語多良間方言のアクセント型の記述」『比較日本文化学研究』1-42, 広島大学大学院文学研究科総合人間学講座.

五十嵐陽介 (2023) 「南琉球宮古語池間方言における韻律的単位「韻律語」の特性」『日本言語学会第 167 回大会予稿集』508–513.

五十嵐陽介・田窪行則・林由華・ペラール トマ・久保智之 (2012) 「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』16(2), 134–138.

上野善道 (1977) 「日本語のアクセント」大野晋・柴田武編『岩波講座 日本語 5 音韻』281–321, 岩波書店.

新田哲夫 (2023a) 「南琉球多良間方言アクセントの弁別特徴」『金沢大学歴史言語文化系論集 言語・文学篇』18, 1–20.

新田哲夫 (2023b) 「南琉球宮古島与那覇方言のアクセント体系と弁別特徴」『日本方言研究会第 116 回研究発表会発表原稿集』57–64.

平山輝男・大島一郎・中本正智 (1968) 『琉球先島方言の総合的研究』明治書院.

松森晶子 (2010) 「多良間島の 3 型アクセントと『系列別語彙』」上野善道監修『日本語研究の 12 章』490–503, 明治書院.

松森晶子 (2013) 「宮古島与那覇方言のアクセント交替」『日本女子大学紀要 文学部』62, 1−21.

Igarashi, Yosuke, Yukinori Takubo, Yuka Hayashi and Tomoyuki Kubo (2018) ‘Tonal neutralization in the Ikema dialect of Miyako Ryukyuan’, Kubozono, Haruo and Mikio Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization*, De Gruyter Mouton, 83–128.

Shimoji, Michinori (2009) ‘Foot and rhythmic structure in Irabu Ryukyuan’, *Gengo Kenkyu* 135: 85–122.

Uwano, Zendo (2012) ‘Three types of accent kernels in Japanese’, *Lingua* 122/13: 1415–1440.

【付記】この研究は JSPS 科学研究費補助金 課題番号 20H01259 研究課題「南琉球宮古諸方言のアクセントに関する調査研究」（研究代表者: 新田哲夫）によってなされた。